

---

# ペロの家出

文樹妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペロの家出

### 【Nコード】

N2237E

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

ぼくはペロ。真っ白な子犬だよ。ソウタくんにもいじめられてばかりだったぼくは、家出することにしたの。ペロの冒険と、その結末は……。家族の温かさや愛情をテーマにした童話です。

**(前書き)**

この作品は、「ムーンチャイルド企画」への参加作品です。

ぼくはペロ。生後半年の子犬だよ。

真っ白の毛並みが自慢で、もこもこしてて、ぬいぐるみみたいって、よく言われるんだ。

ペロって名前はね、ソウタくんが付けてくれたんだよ。

ソウタくんってのは、ぼくのお兄ちゃん。今年の春から、小学校ってところに入ったばかりなんだって。

だけど本当はね、ソウタくんより、ぼくのほうがお兄ちゃんなんだよ。

だって、ママさんが言ってたもん。ぼくは人間の年じゃあ、もう九歳なんだって。ソウタくんより年上なんだよ。

それに、ソウタくんは、ぼくのこと、いつもいじめるの。

頭をたたいたり、尻尾をひっぱったり、ぼくの散歩やエサも忘れるし、全然可愛がってくれないんだ。

だから、ぼくね、決めたの。

こんなお家、出て行ってやるんだ！ って。

そう、あれは今朝のこと。

ソウタくんが学校へ行く前に、ママさんが言ったの。

「ペロの首輪はずして、お庭で遊ばせてあげなさいよ！」って。

それは毎朝のぼくの日課なんだけど、ソウタくんはやっぱり忘れてて。

何度もママさんに怒られてから、やっとぼくの首輪をはずしてくれたんだ。

喜んでかけまわろうとしたぼくの頭を、ソウタくんはまたポカんとたたいて、学校へ行っちゃった。

その時、ぼくは気づいたんだ。

いつもは閉まってる、お家の門が、ちょっとだけ開いていたのを。きつと、急いでたソウタくんが閉め忘れたんだよ。

ママさんは忙しそうに、ベランダで洗濯物をほしてる。

それで、ぼくは、気づいたら走ってた。

外の世界へ。

そうだ、こんなところから、逃げ出してやるんだ。

もっといいところへ、行ってやるんだ！

そうやって、ぼくの家出は始まったんだ。

最初は、とつても嬉しかった。

初めて一人で見える外の景色。ひもをぐいぐい引つ張られずに、のんびり歩ける。

行きたいところへ、見たい場所へ。

ぼくはキョロキョロ、あちこちを見回した。

空には太陽、緑の木はきれいで、鳥が鳴いてる。

ああ、なんて、幸せなんだ。

ぼくは自由なんだよ！

大きな声でぼくがさけびたくなった、その時だった。

ブーン、と音がして、突然後ろから何かがやってきたんだ。

ぼくはあわてて飛びのいたけど、その拍子に電信柱にぶつかっちゃった。

あいたたた、びっくりしちゃったよ……。

ちかちかする目を開けたら、さっきの音はもう遠くに行つて、ぼくはわかった。

ああ、あれはいつも、お家に何かを届けにやってくる、大きな自転車。

ソウタくんが乗ってるのが大きくなって、うるさく、はやくなっ

たみたいなやつ。

なんだかいばって見えて、ぼくはきらいだったんだ。

ああ、やっぱりいやなやつだった。今度からは、気をつけなきゃね。

まだどきどきしてるぼくは、それでも背中をしゃんと伸ばして、また歩き出した。

そしたらね、お姉さんたちに会ったんだよ。

みんなでおそろいのお洋服を着たお姉さんたちは、ぼくを見て、みんなにっこりしてくれた。

「きゃあ〜かわいい!」

口々にそう言っつて、ぼくをかわりばんこになでなでしてくれたの。

ぼくは、ちよつと恥ずかしかつたけど、胸を張って言っつたんだ。

「ぼくね、今日から一人なんだ! 家出したんだよ! これから、自由に生きていくんだ!」

でもぼくの言葉はわからないみたいで、お姉さんたちはただ笑って、手を振ってくれた。

みんながぼくを応援してくれてるみたいで、ぼく、とつても嬉しかったんだよ。

そのまま、ぼくがごきげんで歩いてたら、いつの間にか、散歩で来たことのない道まで来ていた。

ぼくは、のどをぐくん、と鳴らした。

どきどきしたけど、なんだか大人になった気がしたよ。

ちよつと下がりそうになったしっぽを、またぴんと上げて、ぼくは進んだ。

そしたら、急に大きな声が出たんだ。

「こら、なんだお前！　ここは俺の縄張りだぞ！」

びっくりして振り返ったら、そこには大きな黒い犬のおじさん。  
お顔にちよつと傷があつて、とつても怖そう。

「あ、あの……ぼく……」

あんまりびっくりして、ぼくは何て言つていいかわからなかった。  
そしたら、おじさんは、ぼくをじろじろと見てきたんだ。

「お前、野良にしちゃあ、おかしいな。でも、首輪はしてねえみた  
いだし……そんなちっこいのに、どうしたんだ」

声は怖いけど、ちよつと心配してるような顔で言つてくれたから、  
ぼくはやつと落ち着いてきた。

「ぼく、家出してきたんです」

「家出？」

ぼくの返事を聞いて、おじさんは、不思議そうな顔をした。

「なんで、家出なんかしてきたんだ」

「だ、だつて……ソウタくんが、ぼくのこと、いじめるんだもの。  
頭を叩いたり、尻尾を引つ張つたりするの。ひどいでしょ？」

それに、パパさんは、いつもお仕事でお家にいないし、お休みの  
日だつて、寝てばかりで遊んでくれないんだよ。

ママさんはごはんをくれるけど、ぼくよりソウタくんばかりお  
世話してるんだもん。

ぼくはね、全然可愛がってもらつてないんだ。だから、家出して  
きたの」

ぼくの話、黙つて聞いていたおじさんは、ふん、と鼻をならし  
た。

「お前……そんなことで家出したのか？　家出なんかしてもいいこ  
とはねえぞ。悪いことは言わねえ、とつと家に帰んな」

てつきり、わかつてもらえると思つていたぼくは、そんな風に言  
われてびっくりしたんだ。

「そんな……どうして？　お家になんか、戻りたくないよ」

「どうしてって、お前こそ、どうしてそんなに家がいやなんだ？」

家にいたら、エサはもらえるし、寝るところだ。楽でいいだろ。」

「でも……じゃあ、どうしておじさんは一人でいるの？ そのほうが楽しいからじゃないの？ お外にいるほうが、自由でいいじゃない。」

必死で言ったぼくに、おじさんは困ったような顔をした。

「だけど……外にいたら、エサだって、自分で探さなきゃいけないぞ？ 大変なことだって、色々あるし。」

渋い顔をしたおじさんに、ぼくはそうだ、と尻尾を振った。

「ねえ、じゃあ、おじさんと一緒にいさせてよ！ おじさんがぼくに、色々教えてくれたらいいじゃない。お願いだよ、おじさん！」  
覗きこんだぼくを、長い間見ていたおじさんは、ぐうう、と低くうなつて、頭を垂れた。

「まったく、しょうがねえ坊やだな……はぐれないように、しっかり付いてきな！」

大きな尻尾を振り上げて、前を歩き出したおじさんに、ぼくは勇んで付いていった。

それから、ぼくはおじさんと一緒に町を歩いたんだ。

おじさんは色々なことを知ってた。

あっちの道は、人が多くて危ないから、行かないほうがいい、とか。

大きな道路は、車、っていう怖いのがいっぱいいるから、気を付けて、とか。

おじさんみたいな野良犬たちが集まる場所、とか。

あと、人間の子供には、気をつけたほうがいい、とかね。

子供たちは、ぼくらをなでたりもしてくるけど、蹴られたりする

ることもあるからだって。

それはぼくにもようくわかった。だって、ソウタクンを思い出したから。

そして、歩き続けていた時、ぼくのお腹がぐるぐる鳴った。

それに、こんなに歩いたのは初めてで、足もくたくただったんだ。

「そうか、腹減ってるよな。食い物のことも、教えてやんねえとな」

おじさんは、たのもしい口調で、ぼくを連れて行ってくれた。

辿り着いたのは、何かおいしそうな食べ物物の匂いがする、場所だった。

「ここはな、ラーメン屋つてんだ。この裏には、人間たちの残した食い物がある。うめえんだぞ」

そう言うとおじさんはすばやくぼくに、食べ方を見せてくれた。

ドッグフードしか食べたことがないぼくは、最初はびっくりした

けれど、食べてみてびっくりした。

なんだかわからないけど、とってもおいしかったから。

お店の人間が出てくる前に、急いで食べなきゃいけないけど、ぼくは大満足だった。

帰り際に、他にもこういう食べ物がある場所をいくつか教えてもらって、ぼくはおじさんに感謝した。

夕暮れの裏道を歩きながら、ぼくはなんだかほこらしい気分だったんだ。

こうして、外の世界で、ぼくはちゃんとやれてるじゃないか。

そりゃあ、まだおじさんがいないとだめだけど、そのうち一人でだって、立派に生きていけるようになるさ。

尻尾をふりふり、ぼくは楽しくて仕方なかった。

その夜は、おじさんがねぐらにしている、公園の植木の中で寝ることになった。

人間が捨てていった新聞の上に、寝ころんで、ぼくらはおしゃべりをしてた。

今日一日の冒険に、ぼくは興奮していたけど、段々ねむたくなつて……。

「こうやってな、今は季節がいいからいいけど、冬になったら、寒くて大変なんだぞ」

おじさんは一生懸命おしゃべりしていたけど、ぼくはもう、半分眠りの中。

ため息をついたおじさんにもたれて、ぼくはいつのまにか、目を閉じていた。

そして夢の世界へまっしぐら。

明日はどんな冒険が待っているんだろう。

ぼくは、わくわくしながら、一日を終えたんだ。

このまま、おじさんと楽しい日々が続いていくんだ。

そう安心してた次の朝、いきなり事件は起こった。

おじさんと、朝ごはんを探して歩いていた、その時だった。

大きな大きな車がやってきて、突然おじさんが捕まえられたんだ。

「おじさん！」

叫んだばかりに、おじさんはあばれながらも答えた。

「逃げる、早く逃げるんだ！」

逃げる……？ どうして？ 何が起こったの？

混乱していたぼくは、咄嗟に動けなかったけど、怖い顔をした人間たちが、近づいてきて、あわてて走った。

その間にも、おじさんは大きな入れ物に入れられて、車に乗せられているの見える。

「おじさんをどこに連れて行くの？」

必死で叫んだぼくの声は、無視されて、人間たちは、ぼくを捕まえようとやっきになっていた。

「俺のことはいいから、お前は逃げるんだ！ 自由に生きるか、家族のところに戻るか、どっちでもいい！ とにかく無事に逃げてください！」

おじさんの声が、ものすごく真剣だったから、ぼくはそれ以上振り返るのをやめて、走った。

途中で水溜りにすべってこけたけど、それでも立ち上がって、ぼくは走る。

走って、走って、全速力で走って、こんなに走ったことはないくらいに走って、気がついた時には、もう人間も、その車もいなくな

た。

そう、そしておじさんも。 。  
小さな公園に辿り着いて、ぼくは、気が抜けたように座り込んでいた。

外の世界で、初めて出会った優しいおじさん。  
一体、どうして連れて行かれてしまったんだろう。

何もわからなかったけれど、おじさんがもう戻ってこないのだということは、なんとなくわかった。

「おじさん……」

突然一人ぼっちになって、ぼくはなんだか心細くなっていた。

昨日はきらきら光って見えた外の世界も、今日はなんだか恐ろしい。

しばらく、そうやって座り込んでいたぼくだったけど、いつまでもこうしてちゃいけないって思って、立ち上がったんだ。

だって、おじさんが言ってくれたから。

自由に生きるか、家族のところに戻るか。

ぼくは、自由に生きるんだ。おじさんみたいに、強くなって、一人でもちゃんと、生きていってみせるよ！

また歩き出したぼくは、もうそこがどこだかもわからなかったけど、それでも必死で歩いていった。

だけど、もう足が疲れるぐらいに歩いたのに、おじさんに教えてもらった、食べ物のある場所に辿り着けなかったんだ。

ああ、お腹がすいたなあ。

あんまり喉が渴いて、道端のにごった水もなめてみたけど、なんだか砂でごろごろして、飲めなかった。

お腹がすきすぎて、ふらふらしていたぼくは、ふと漂ってきたいい匂いにつられるように歩いていった。

そしたら、なんとそこには、おいしそうな食べ物がいっぱい並んだ、お店があったんだ。

まあいい形をした、ふんわりいい匂いのするそれが、何て言うのか、ぼくは知ってた。

そうだ、あれはコロッケっていうんだ。パパさんが、前に、内緒で少しだけくれたんだよ。とってもおいしかったなあ……。

ぼくは、そのままふらふらと、コロッケのほうへ近寄っていった。「いらっしやいませ〜いかがですか〜」

にこにこしながら言っている優しいそうなおじさんの顔が見えた。

ぼくは、そのおじさんに向かって、頼んだんだ。

どうか、一つ分けてくださいって。

ぼくの声に気づいて、おじさんが出てきたから、ぼくはやった！と思った。

やっぱり、優しいおじさんだ。ぼくに一つ、コロッケをくれるに違いないって。

それなのに、おじさんは急に怖い顔になって、ぼくを見下ろしたの。

「なんだ、この野良犬が！ しっ、しっ！ さっさとあっち行け！ ぼくを追い払うように手を大きく振るおじさん。」

でもぼくは、あんまりお腹がすいて動けなくて、おいしそうなコロッケがあきらめきれなくて、その場に留まっていた。

そしたら、おじさんは顔をしかめて、ぼくのほうへやってきた。  
「あっちへ行行って言ってるだろう！　こんな小汚い犬が店の前にいたら、商売になんねえんだよ！」  
白い長靴を履いた足で、ぼくを蹴ろうとしてくるおじさんに、ついにぼくはその場から逃げ出した。

そして、とぼとぼと歩いていたその時、ぼくは見たことのあるお姉さんたちを見つけた。

あ、あれは、昨日ぼくを可愛いつて撫でてくれた、お姉さんたちだ！

あの人たちのところへ行けば、何か食べ物をもたらえるかもしれない！

ぼくは喜び勇んで、お姉さんたちの足元へ駆け寄った。

鳴いて訴えかけたぼくの声に、振り返ったお姉さんたちは、みんなが眉をひそめて言った。

「いやっ、何この犬、きつたな〜い！」

「やだ、こつち来ないでよ！」

昨日とは全く違う、いやそうな顔でそう言われて、ぼくは、必死で振っていた尻尾をだらりと下げた。

なんでなんだろう。

昨日は優しかったのに。

お姉さんたちが歩いていってしまっただけから、ふと横を見たぼくは、お店のガラスに、映っていたぼくの姿を見た。

なんとということだろう。

あれだけ、真っ白でキレイだったぼくの毛は、薄汚れて、白い色すらわからなくなっていた。

ぬいぐるみみたいにもこもこしてた毛が、濡れてかたまって、ぼくじゃないみたいだった。

そこに映っていたぼくは 自由に生きるために、外の世界へ希望を持ってやってきた、子犬じゃなくて。

ただの、しょぼくれた、汚い野良犬だったんだ。

ぼくは、やっと思い出していた。

ぼくの毛は、いつもママさんがブラシできれいに梳いてくれた。パパさんは、いやがるぼくを、時々お風呂に入れてくれた。

水はなんだかきらいだったけど、いつもすすきりして、気持ちよかつたんだ。

それに、ソウタくん……。

意地悪で、ぼくをいじめていると思ってたけど、ソウタくんの目は、さっきのコロッケ屋のおじさんや、お姉さんたちの目とは違ってた。

ちょっと照れくさそうにぼくを見て、それでも時々笑ってくれた。

ぼくのお家は ぼくが思うほど、悪いところじゃなかったのかな。

今更そんなことに気づいても、もう遅かった。

だって、ぼくは、もうお家から遠く離れてしまったんだ。

帰りたくても、どこへ行けばいいかもわからない。

ぼくは……なんてバカなことをしたんだろう。

路地の隅でうつむいていたぼくは、ぽつり、ぽつりと冷たいものが当たって、雨が降り出したことに気づいた。

すぐに大粒の雨になって、まわりでみんながあわてて走り出す。

ぼくもなんとか歩き出して、雨を避けられる場所を探した。

ようやく辿り着いた、地下道の中で、ぼくはぶるぶると体を振った。

そうやって水滴を落としても、まだ寒くて、ぼくはその時、おじ

さんの言葉を思い出してた。

外の世界は、大変なことがたくさんある　って。

おじさんが言ってたことを、ぼくはやっと理解できたんだ。

何もわからずに、自由に生きてやるなんて思ってた自分が、とても恥ずかしくなった。

でもいくら後悔しても、もう、飛び出してしまった。

ぼくは、どうしたらいいんだろう……。

困り果てて、ふと見上げたぼくの目に、歩いていた親子が見えた。お母さんが、女の子の肩についた水滴をふいてあげている。

仲よさそうに、手をつないで歩く親子を見送って、ぼくは思い出していた。

そうだ、ぼくにも、お母さんがいるんだ。

ソウタくんのお家にもらわれる前は、お母さんと兄弟たちと一緒にいたって聞いた。

あんまり覚えていないけど、そこへ行けば、お母さんたちと暮らせるかもしれない。

確か、同じ町にあるお家だって、ママさんが言っていたけど。

ぼくの足じゃあ、どれくらいで辿り着けるのか、どこへ向かえばいいのかもわからなかったけど、ぼくはやっと見出した希望に、少し元気が出たんだ。

歩いて、歩いて、お母さんを見つける。

そんな、夢みたいな目標が、今のぼくには、唯一の希望になっていた。

雨が上がって、再び歩き出したぼくは、とにかく必死だった。

頑張って、それまではこの外の世界で生きていかなきゃいけない。

そうじゃないと、ソウタくんたちにも、申し訳ないから　。

お腹がすいてどうしようもなく、ぼくは道端の草も食べた。泥水も飲んだ。

歩いてるうちに、道路の端の溝にもはまったけど、必死で自分で脱出した。

もう、ぼくの体は泥だらけで、あちこち痛くて辛かったけど、それでも歩くのはやめなかった。

なんとかしても、お母さんのところへ辿り着くんだ。

それだけを支えに、ぼくは頑張った。

お母さんに会ったら、何て言おう。

お母さんは、ぼくが家出したのを知ったら、何て言うのかな。

心配してくれるかな、それとも叱られるかな。

でも、ぼくはお母さんに言うんだ。

ぼく、それでも一人で頑張ったよって。

まだ見ぬお母さんの笑顔を思い浮かべながら、ぼくが歩いていた、その時だった。

通りかかった公園に、水を飲もうかと入っていったぼくは、ごみ箱に捨てられた、オニギリを見つけたんだ。

空腹も限界だったぼくは、喜んで駆け寄った。

そしてなんとか網の隙間から前足でかき出して、オニギリを取る事ができた。

いただきます！

ぼくが、大きく口を開けた、その瞬間。

後ろから、誰かの吠える声が聞こえた。

振り返ったぼくが目にしたのは、何匹かの大きな犬のお兄さんたち。

「お前、俺たちの縄張りで何やってんだ！」

リーダーみたいな目つきのお兄さんに睨まれて、ぼくはあわててオニギリから離れた。

「ご、ごめんなさい。でも、ぼく、お腹がすいて……」

説明しようとしたぼくの声は聞かずに、お兄さんたちはあっとい

う間にオニギリを奪い返して、ガツガツと食べてしまった。

「あ、あの」

「これ以上、ここをうるついたら、チビでも容赦しねえぞ！ とつとど、行っちまえ！」

お兄さんの怒鳴り声は、とてもじゃないけど、聞き耳なんか持つてくれそうになかった。

みなですごみながら、吠え立てられて、ぼくはあわてて逃げたんだ。

それでも、二度と来ないようにか、すごい剣幕で追いかけて、ぼくは後ろも見ずに走った。

走り続けて、なんとかお兄さんの声が聞こえなくなって、ふとあたりを見渡した時、もうすっかり夕暮れが訪れていた。

ぼくは、いつのまにかお家がたくさん並んだ場所までやってきていた。

ここは、一体どこなんだろう……。

賑やかな子供の声が遠くで聞こえて、灯りのついた家々は、とてもあつたかそうに見える。

もう、元気が出なくて、ぐったりした体でぼくは座り込んでいた。お腹がすいて、もう一生動くこともできない気がした。

そのまま、意識が遠のきそうになった時だった。

あれ……？

ふと目にした赤い屋根に、なんだか見覚えがあるような気がしたのだ。

そして、その前にある、大きな木。

道の角には、赤くて丸いもの あれは、そう、ポストって言うんだ。

ぼくがいつもおしっこをかけるから、ソウタくんが教えてくれた

の。

そんな……まさか、本当に？

ぼくは無意識に立ち上がっていた。

あのポストを越えたら、小さな公園があつて、マンションがあつて、そしてその角を曲がったら　　！

「お家だ　　！」

ぼくは、信じられない気持ちで、立ち止まっていた。

だって、それは、まぎれもないぼくのお家だったんだもの。

青い屋根に、白い壁の、懐かしいお家。

家の前には、ソウタくんの、新しい自転車がとまってて、その隣には、ママさんがいつも買い物に使う、古い自転車が並んでる。

「ぼく、帰つて、きたの……？」

いつの間にか、咳きながら、ぼくは一步、二歩、と進んでく。

黒い扉は、昨日の朝見た時と同じように、少しだけ開いていた。

その隙間から、そうつと覗いたぼくは、そこに見えた光景に、思わず足を止めたんだ。

「草太、もういいから、お家に入って、ご飯食べなさい」

「いやだ！　だって、ペロが帰つてないもん！　ペロと一緒に食べるんだもん！」

「草太……」

困つたように言うママさんの隣で、叫んでいるのはソウタくんだった。

でも、その顔は、いつもと違って、涙でぐしゃぐしゃで……ぼくは、本当にびっくりしたんだ。

「ぼくが、いつもいじめてばっかりだったから、ペロが出てっちゃったんだ……ぼくが、ぼくがペロに優しくしなかったから、だから、ぼくが悪いんだ　　！」

ペロが戻ってくるまで、僕、ちゃんと待ってなきゃいけないんだもん　！」

しゃくりあげながら、ママさんに叫ぶソウタくんを見て、ぼくはその場から動けなかった。

「ねえ、ペロ、このまま戻ってこないの？　戻ってこなかったら、どうしよう……僕のせいだ。ぼくが、ちゃんと門扉を閉めなかったから、ペロが外に出ちゃって、車にひかれてもしてたら、僕、どうしたらいいの　？　そんなの、いやだよ、ねえ、ママ　！」  
泣きじゃくるソウタくんを、優しく抱きしめて、ママさんは微笑んだ。

「大丈夫、大丈夫よ、草太。きつと、ペロ、戻ってきてくれるわよ。草太を置いて、どっかへ行っちゃうわけないじゃない。きつと、どこかで迷っているだけなのよ。」

だから、ちゃんと信じて待ってましよう。ね？」

頭を撫でて、そう言ったママさんを、ソウタくんは、涙に濡れた瞳で見上げた。

「本当……？」

ソウタくんの小さな声に、ママさんはしっかりと頷いて、笑った。「そうよ。だから、ペロが帰ってきたら、ちゃんとお世話してあげること。弟が欲しいって言う草太のために、パパがもらってきてくれた、大事なペロだもの。いいわね？」

ママさんに言われて、ソウタくんは、涙を拭いて、頷いた。

「うん！　僕、今度こそ、ペロに優しくするよ。だって、僕、お兄ちゃんだもん」

目を輝かせてそう言ったソウタくんを、ママさんは優しい瞳で見つめた。

「僕ね、ペロが来てから、なんだか照れくさくて、どうしたらいいかわからなかったの。でも、そんなんじゃないだめだよ。ペロが帰ってきたら、僕が、ちゃんと散歩にも連れて行く。」

もつと一緒に遊んであげるよ。だって、僕、ペロが大好きだから

「！」

力強くそう言ったソウタくんに向かって、僕は思わず走り出して  
いた。

ソウタくん　ぼくも、ソウタくんが好きだよ……！

大きな声で鳴いたぼくの声に、ソウタくんは顔を上げて、大きく  
瞳を見開いた。

ママさんも振り返って、そして、二人でぼくの名前を呼んでくれ  
たんだ。

「ペロ！」って。。

ソウタくんに飛びついて、思いつきりその顔をなめたぼくを、ソ  
ウタくんは嬉しそうに抱きしめてくれた。

いつまでも顔をなめつつけるぼくに、ソウタくんはくすぐったそ  
うに笑っていた。

「あつ、こいつ、すっごい汚れてるよ、ママ！　あゝあ、服が汚れ  
るじゃないか、ペロったら。仕方ないなあ、もう　！」

そう言いながらも、ソウタくんは、いつもみたいに怒ったような  
顔はしてなかった。

そして言ったんだ。

「初めて会った時も、こいつ、僕の顔を一番になめたんだよ。こう  
やって　だから、僕、ペロって名前にしたの。お帰り……ペロ！」

くしゃくしゃの笑顔でそう言ったソウタくんに、ぼくは大きく吠  
えたんだ。

その夜は、久しぶりに満腹になった。ママさんは、いつものドッ  
グフードじゃなくて、パパさんが買ってきたコロツケを二つもくれ  
たんだよ！

パパさんとソウタくんに、汚れた体をごしごし洗ってもらって、

ぼくはまた、真っ白のペロに戻った。

ぼくはね、みんなにぼくの大冒険を話してあげたけど、みんなただにここにこして、ぼくを撫でてくれただけだった。

でもいいんだ。言葉は通じなくても、大切な気持ちは、きっと通じたと思うから。

そして、ぼくはソウタクんの隣で眠った。幸せな夢を見ながら。

そんな波乱万丈な家出から戻った、次の休日。

なんと神様は、もう一つのプレゼントを用意してくれていたんだ。ううん、正確には、ぼくの大好きな家族のみんなが、ただ。車に乗せられて、ぼくはどこへ行くのかと思っていた。

辿り着いたら、そこは、黄色い屋根の大きなお家で、庭に放されたぼくは、早速探検を開始しようとした。

だけど、そこには、何よりも素敵なものが待っていたんだ。

「お母さん？」

なぜか、言葉が出ていた。心で考えるよりも先に、わかったんだ。真っ白な毛並みの、大きな犬。優しい瞳で、ぼくを見ていた。

そして、隣には、二匹の小さな弟。

「よく来たわね、ペロ」

飛びついたぼくを優しくなめて、お母さんが言った。

「お母さん！」

嬉しくて、嬉しくてお母さんに体をこすりつけるぼく。

お母さんは笑顔で言った。

「いい名前をもらったわね　ペロ、あなたは、今、幸せ？」

ぼくをじつと見つめて訊ねたお母さんに、ぼくは飛びつきりの笑顔で言ったんだ。

「うん！　ぼく、すごく幸せだよ！　とってもいい家族がいるから

「！」

ぼくの答えに、お母さんは満足そうに笑ってくれた。

ぼくはペロ。生後半年の、真っ白な子犬。

ぼくの家族はね、世界で一番の、素敵な人たちだよ。

(後書き)

子供をテーマにした作品で、動物の子供が主人公でもいいという条件を読んでから、考えたお話です。

子犬のペロの視点からですが、小学一年生のソウタくんの成長も一緒に描けたらな、と思って書きました。

家族の温かさと愛情を感じられる物語になっていれば、幸いです。感想、コメント等、何でもお待ちしております。

「ムーンチャイルド」で検索されると、他の作家さまの素敵な作品も読めますので、ぜひどうぞ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2237e/>

---

ペロの家出

2010年10月8日15時36分発行